

大学時報

U N I V E R S I T Y C U R R E N T R E V I E W

No.389

2019

11

隔月刊



ラーニング・commons (南山大学)

特集 東京2020オリンピック・パラリンピック 競技大会開催と連携した大学の取り組み

座談会 大学広報紙の課題と展望

明日への試み 青山学院大学

加盟校の幸福度ランキングアップ

立命館大学／東邦大学／東京女子医科大学

クローズアップ・インタビュー

株式会社阿部蒲鉾店 代表取締役社長 阿部賀寿男さん

日本私立大学連盟

だいがくのたから

東北公益文科大学

『大学設立宣言』

「今、東北の一郭・庄内の地には、創造と進取の気象がみなぎっている。その息吹のなから新しい大学が誕生した。日本ではじめて公益学に挑戦する東北公益文科大学である。」

これは本学の『大学設立宣言』の冒頭に書かれている文言だ。本学が位置する山形県庄内地域は、私財を投入してクロマツ防砂林の植林を行った本間光丘や鶴岡市羽黒地区松ヶ岡を開墾した旧庄内藩士たちなど、古くから「公益」の意識を持った先人が数多く存在していた。このような歴史的背景もあり、東北公益文科大学は四年制大学がなかったこの地域から熱望され、21世紀を生きるうえで欠かせない概念となるであろう「公益」を研究する大学として、山形県および庄内14市町村が設立費用を負担し学校法人が運営する「公設民営方式」によって2001年に開学した。

現在は、『大学設立宣言』で掲げた理念を具現化するひとつとして、「新しい地域資源を生み出す研究」に取り組んでいる。具体的には、ドローン、モーションキャプチャー、高解像度カメラなどITを駆使し、VR（バーチャルリアリティ）やアニメーションに変換、画像として視覚化することにより、「黒川能」「酒田甚句」など動きのある民俗芸能の伝承環境と、日本遺産の一部「羽黒山」などの景観保存の手法検討を進めている。また、「庄内から日本の教育を変える大学づくり」をキャッチフレーズに、卒業時における教育の質保証、手厚い留学支援によるグローバル人材の育成などにも力を入れている。

本学はこれからも、この『大学設立宣言』のもと、地域とともに協働・共創しながら研究・教育を推進し、社会に求められる人材を日本全国、さらに世界へと輩出し続ける。



大学時報

No.389

2019.11

Thesaurus Universitatis だいがくのたから

東北公益文科大学

表紙・大学点描 南山大学

巻頭言 Hominis Dignitati (人間の尊厳のために)

鳥巢義文

創立100周年に向けて

永尾教昭

座談会 大学広報紙の課題と展望

小室和子／長野留三子／調麻佐志／花岡正樹／(司会) 山田健太

16

特集 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開催と連携した大学の取り組み

オリンピック・パラリンピック教育の普及と支援

秋和真澄

32

実践、渋谷そして五輪——学生がつないだ6年間の軌跡

深澤晶久

34

全国外大連合による「通訳ボランティア育成の取り組み」

朴ジョンヨン

50

〈神田外語大学の成果と今後の展望〉

plus PDCA

根津公一

56

私の授業実践——教育現場の最前線から

「丸暗記型」から「思考過程解明型」へ

笹山文徳

58

明日への試み

青山学院大学コミュニティ人間科学部
大学による地域貢献を目指して

鈴木眞理

60

加盟校の幸福度ランキングアップ《小中学生向けイベント編》

近隣小学校児童を対象とした学生主体による体験型イベント
「立命の家」・立命館大学

岩谷絢子

64

理学部における地域貢献活動と教育活動

畑中敏伸

66

——小中学生向け実験工作教室の実施——・東邦大学

未来のいのちと健康を支えるのは「あなた」

岡田みどり

68

——女子中高生の理系進路選択支援プログラム・東京女子医科大学

クローズアップ・インタビュー

株式会社阿部蒲鉾店 代表取締役社長 阿部賀寿男さんに聞く

(聞き手) 川島 葵

70

新会員代表者紹介

獨協学園／豊田工業大学／早稲田大学

78

執筆者・出席者のご紹介・80

連盟ニュース・82

編集後記・84

(カット) 熊谷有子

〈表紙写真〉

ラーニング・コモンズ（南山大学）



南山大学では、グローバル化する社会のさまざまな分野で活躍できる人材の育成を推進しています。学生が既存の枠にとらわれない新たな発想を生み出す場として、学内4カ所にラーニング・コモンズを設置しており、多目的な学修スペースとして、学生の主体的な学びを支えています。中でも2017年4月に開設したQ棟2階のラーニング・コモンズは、約700平方メートルのスペースにグループ学習エリア、多目的エリア、ラウンジエリアを備え、日々多くの日本人学生や外国人留学生が利用し、活気にあふれています。



南山大学は2021年に
創立75周年を迎えます



南山大学は、1946年に設立された南山外国語専門学校が前身となって、
今日では8学部17学科6研究科を擁する総合大学へと発展しています。

これからも世界から選ばれる大学であり続けるために、
“国境のない学びの場”を提供し、多様な取り組みを実践していきます。



南山大学

海外実習

30の国・地域に105の協定校があり(2019年10月1日時点)、学びの舞台は世界に広がります。各学部でも、世界各地で異文化交流や言語習得などを目的とした短期留学プログラムを行っています。



外国語学部アジア学科
海外フィールドワークA(台湾)



人文学部
人文学異文化研修短期留学プログラムA



国際教養学部国際教養学科
ASU短期留学プログラム



法学部法律学科
韓南大学校学術交流



経営学部経営学科
ビジネス英語海外研修



総合政策学部総合政策学科
政策研修プログラムC(韓国)

NU-COIL ~ Nanzan University Collaborative Online International Learning ~

COIL (Collaborative Online International Learning)とは、SNSやビデオチャットなどのオンラインツールを活用した国際的な双方向の教育手法のことです。NU-COILは、海外の大学の学生と授業内外で協働プロジェクトや意見交換を行うCOIL型授業と海外留学、企業におけるインターンシップを組み合わせ、グローバル人材に必要な力を身につけるための南山大学ならではの取り組みです。2018年に文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択されています。





◀ワールドブラザ
外国語や異文化について学べる、
日本語禁止のエリア。

学内留学

世界の国や地域から年間約300名もの外国人留学生が集う南山大学のキャンパスには、留学生と日本人学生との交流を深める施設やイベントがたくさん用意されており、外国語運用能力や異文化理解のステップアップが可能です。



▲多文化交流ラウンジ(Stella)
全ての南山大生が自由に多文化交流を体験できるスペース。

人類学博物館

「全ての人の好奇心のために」「誰もが楽しめる博物館」をモットーに、実際に手で触れながら人類学・考古学・昭和の家電(現代生活資料)などの展示を鑑賞できる博物館です。





レーモンド・リノベーション・プロジェクト

Raymond Renovation Project 2017-2021

南山大学では、建築家のアントニン・レーモンド(チェコ共和国)の設計によって1964年に完成した建物を中心とした、内外装改修、安全性・利便性向上のための外構整備計画である「レーモンド・リノベーション・プロジェクト」を実施しています。レーモンド氏の「自然を基本として」という設計思想に基づき、学生生活環境や学習環境を充実させ、歴史ある建築を次世代に継承していきます。



個の力を、世界の力に。

南山大学

〒466-8673
愛知県名古屋市中区山里町18
<https://www.nanzan-u.ac.jp/>

- 人文学部 キリスト教学科 / 人類文化学科 / 心理人間学科 / 日本文化学科
- 外国語学部 英米学科 / スペイン・ラテンアメリカ学科 / フランス学科 / ドイツ学科 / アジア学科
- 経済学部 経済学科 ■ 経営学部 経営学科
- 法学部 法律学科 ■ 総合政策学部 総合政策学科
- 理工学部 システム数理学科 / ソフトウェア工学科 / 機械電子制御工学科
- 国際教養学部 国際教養学科

大学時報

No.389

2019.11



Hominis Dignitati (人間の尊厳のために)

鳥巢 義文 ● 南山大学長

カトリック神言修道会を設立母体とする南山大学は、2021年に創立75周年を迎える。その起源は、少人数教育や家庭との連携を重視し、地域に根ざした教育を実現するため、1932年に設置された旧制南山中学校に求められる。

「Hominis Dignitati (人間の尊厳のために)」という教育モットーの下、ますます複雑化、グローバル化する社会において、世界のどこにあっても、人びとと共生・協働していく普遍的な価値観を持ち、さまざまな課題に取り組み、それらを解決していく専門性や人類の平和な未来を切り開く創造力を身につけた南山生の育成を推進している。

創立100周年に向けて

永尾 教昭 ● 天理大学学長

はじめに

天理大学は、1925（大正14）年、わが国初の私立外国語学校として、「天理外国語学校」という名称で設立された。当初は、天理教の海外布教に携わる布教師の養成を目的とする学校であった。設立者は天理教二代真柱（教主）、中山正善である。

設立に際して、中山は朝鮮語部を設置しようとした。しかし、当時は日韓併合の時代である。従って、時の文部省は、朝鮮は外国ではなく朝鮮語という外国語は存在しないと主張し、その設置が許可されなかった。そこで、致し方なく「当分ノ内」とただし書きをつけることで募集が認められた。本学の朝鮮語部（現外国語学科韓国・朝鮮語専攻）は私立ではわが国最古を誇る。

設立当初から、語学教育とともに人格形成のためにラグビー、柔道などスポーツに力を注いできた。

他方、学校設立に伴い、「海外事情参考品室（現天理大学附属天理参考館）」を学内に設置した。そこには、主に外国の看板や日用品などが展示された。これは言語を習得し、その国々へ布教師として赴くのに際し、まず学内でその国の文化や文物を知るという目的で設置されたものである。

さらに、後年世界的にも有名になる天理図書館（現天理大学附属天理図書館）も開館している。ここには、『日本書紀・乾元本』や『ナポレオン版エジプト誌』など国内外の貴重な古典籍も収集された。現在、同図書館には国宝6点、重要文化財86点が所蔵されている。

両館は一般には「天理図書館」、「天理参考館」と

呼ばれるが、これは単に大学の施設であることを超えて、一般の人々に広く利用してもらいたいという設立者の思いであろう。

1 天理大学ビジョン2025

2025年、本学は創立100周年を迎える。いま、国内の大学は非常に厳しい時代を迎えている。これ乗り越えるというよりも、むしろ発展の好機としたいとの思いから、一昨年度初頭に「天理大学ビジョン2025」(以下、ビジョン)を発表した。本稿では、その改革の主旨について述べてみたい。

ビジョンは、例えば新たな校舎を建築するとか、学科をどのように再編成するかといった具体的な改革内容というより、本学のこれからの方向性の理念をまとめたものである。その理念に則って、現在具体的な改革を進めている最中である。

このビジョン制定に向けては、まず100周年構想委員に10名の教職員を任命した。彼らに改革に向けた学長の個人的な考えを述べ、それを委員会の中で整理、検討し、案を作成した。

制定するに際し、できるだけ多くの教職員の考え

を反映させたいと考えた。幸いというべきか、本学は専任の教職員が合わせて約250名の、どちらかといえば小規模大学である。二度にわたりこのビジョン案に対する全教職員対象の意見交換会を開催し、意見を集約した。約100名まで入る会議室が、3回ともほぼ満員になった。特に最終回は椅子が足りず、補助椅子を入れたほどであった。また意見も多く出て、最後は司会者が発言者を制限するほどであった。率直に言くと、中には辛辣なものもないわけではなかったが、しかしそれは同時に大学のことを真剣に考えている証左でもあり、筆者にとっては嬉しいことであった。

さらに学生の意見を聞くために、「学長としゃべりタイム」なるものを設け、一切の条件をつけず、希望する学生と学長の直接対話を、市内のクレープ店などを会場に複数回行った。実際には、学生の意見は食堂のメニューであるとか、クラブのことなど個人的な要望が多かったが、これも実施して良かったと思っている。

このような経緯を経て「ビジョン」は完成し、改めて学内外に発表した。ちなみに、教職員意見交換

会や「学長としゃべりタイム」は現在も随時開催している。

2 教育について

本ビジョンは、大きく五つの柱に基づいて改革を進めている。まず「教育について」では、高大連携を進めた。今日まで、三つの高等学校と高大連携協定を締結した。

系列校である天理高校、その兄弟校ともいえるべき天理教校学園高校（別法人）とはさらなる連携の強化を図った。例えば、両校に特化したオープンキャンパスを開催している。また天理高校については、定期的に本学との協議会を開催している。加えて、夏休みに入る直前の3日間、同校の生徒が来学して本学教員の授業を受ける、いわば体験授業を始めた。初日は、学長である筆者が本学の建学の精神や歴史などを講義している。

内部質保証という観点からは、PDCAサイクルを確立するために学長、副学長、事務局長、全学部長、事務部長らによる企画評価会議や、法人の部長も含めた拡大大学運営会議を開催している。文部

科学省の「私立大学等改革総合支援事業」、昨年度採択された「私立大学研究ブランディング事業」などへの対応は、これらの会議で検討し、その進捗状況を確認し合いながら進めている。

学外の意見を聴取する必要性から5人の外部評価委員、専門的な見地から本学に対する率直な意見を聞くための4人の学外アドバイザーを任命、随時意見を聞くことも始めた。

3 学生支援について

学生支援については、まず奨学金制度を抜本的に見直し、整備すべく現在検討中である。

キャリア支援に関しては、一昨年、ビジョンの発表と同時に行った事務機構の改組（後述）で、「キャリア支援部・キャリア支援課」という「一部一課」体制とした。学生の生涯の進路を大学全体で強力にバックアップする体制を作るためである。

留学については、海外協定校を増やし、できるだけ多くの学生を留学させたいと考えている。それとともに、本学のパリ分校ではフランス語の半年研修を開始し、ニューヨーク分校では海外インターンシッ

プ制度を始めた。両研修とも、単位認定の対象としている。加えて、学生の便宜を図るべくドイツ・ケルンにもサテライトオフィスを設置した。

また、語学履修学生でなくても、海外の学生との交流を深めさせたいとの考えから、学内に「CAFÉ（アイ・カフェ）」という異文化交流カフェを設置、日常的に日本人学生と留学生が交流する場を設けた。

昨年度から、新たな課外活動として「外交官養成プロジェクト」も始動。将来は外交官、あるいは国際公務員を目指す学生に特化した養成セミナーを実施している。

一方、海外の学生を受け入れる活動として、本年、32回目を迎えた「夏期日本語講座」（本学を会場に2週間、日本語、日本文化を修得するもの）にも、毎年100名近い海外の大学生、社会人が参加している。本学学生がそのサポート役を務めている。

4 研究支援について

研究支援については、海外協定校との間で学生の交換留学だけではなく、学術交流も積極的に展開できないか検討中である。

以前からあった「長期研修制度（いわゆるサバティカル制度）」に近年は応募教員が少ないので、より多くの教員が取得できるようにしたいと考えている。教員にとつて、学内の諸事から一定期間離れて、新鮮な環境で自らの研究を見直す時間は極めて重要だと考えている。

5 社会連携について

社会連携は、主に本学の所在地である奈良県、および天理市との連携が中心となる。市内に大学は、本学と同じ宗教系の天理医療大学の2校しかない。従つて、普段から天理市との距離感是非常に近い。

一昨年度に「テマリ・イングリッシュ・ビレッジ（英語村）」を開設した。これは、最近、市により天理駅前広場が大きく整備されたが、その一隅を利用して本法人の外国人講師と本学の留学生がスタッフとなり、一般の社会人や市内の小・中学生と英単語やジェスチャーなどで「コミュニケーション」を取ろうという企画である。

本年1月、全国大学ラグビー選手権において、本学ラグビー部が決勝戦までコマを進めたが、年末に

はその壮行会、また決勝戦ではパブリックビューイングを、それぞれ天理市と本学との共催で、駅前広場などを利用して行った。2カ所で1000人以上の多くの市民が応援に駆けつけてくださり、いわば「おらが町の大学」に声援をくださった。

また、本学学生が天理市の行政施策に企画から運営までボランティアで参画することによって、市から表彰を受けるといふ「天理市行政施策貢献学生認定制度」も継続中である。

本学には、キャンパスと外部を仕切る塀がない。筆者は学生に「天理の街全体が君たちのキャンパスだ」と言っている。市長に外部評価委員を務めているなど、市との協力を進めている。

奈良県との関係では、県が進めている「なら歴史芸術文化村」が、本学袖之内キャンパスから徒歩数分のところに2021年に開村予定である。本年6月、本学と奈良県の間でこの事業に関する協定を結び、施設のコテンツ作りに本学が関与することとなった。1951（昭和26）年から活動している音楽部、また先述した著名な附属図書館、民族博物館である附属参考館の所蔵品などの内容を一層多くの

人の目に供して、奈良県と本学がいわゆるウイン・ウインの関係になっていきたいと考えている。

最近では、柔道の国際大会などで、運営サイドの依頼に応じて、本学学生が通訳・案内のボランティアを務めている。

企業との連携として、一昨年、アウトドアの総合ブランドとして有名な株式会社モンベルと包括連携協定を結んだ。

同時に、米国アンダーアーマー社の日本総代理店である株式会社ドームとも提携し、本学スポーツクラブのユニフォーム作製やスポーツブランドの向上などに協力いただいている。

6 管理運営体制について

既に述べたように、一昨年大きく事務機構を改編した。まず、事務局長に教員を任命した。職員は教員を補完することだけが仕事ではない。いわんや、決してその下請けではない。教員と職員は車の両輪であり、どちらか一方が大きくては、同じ場所でも転を繰り返すだけである。しかし、教職協働体制は、口に出すだけではなかなか実現しにくい。そこで、

教員が事務方のトップになって、協働体制を目に見える形で進めることにしたのである。

また、この改編の狙いは、特に志願者募集、就職支援（既述）、および広報の強化にある。志願者募集については体制を入学部に改め、高大接続を主眼として対応に当たっている。広報は、従来の入試・広報部を、学長室直轄の広報・社会連携課とした。これによって、学長、副学長と広報が直結することになり、いち早く情報を発信できる体制となった。

現代の若者は、ことの良し悪しはともかく、新聞をほとんど読まない。もっぱら、スマートフォンなどを利用してSNSなどで情報を集めている。本学もこの流れに乗って、フェイスブックやインスタグラムなどでできるだけ早く情報を拡散させることにした。

新聞とSNSの違いは、前者は意識して手に取らないと情報を得ることができないが、後者はまさにポケットの中にあるスマートフォンが勝手に情報を受け取るということだろう。また、前者は狭く深い有限の情報だが、後者は広く浅い無限の情報となる。それだけに、早さと量が一つの勝負になると思う。

学長室に広報担当部署を設置したのは、これらに対処するためである。

また、学長室に設置しているIR推進課を強化し、教学マネジメントに必要な情報の収集・分析などへの対応の迅速化を図った。

キャンパスの整備については、耐震化の関係もあり、施設・設備の更新などを着実に進めている。特にこだわっているのは、学生が滞留できるキャンパスにしたいということである。授業が終わったら即帰宅するというのではなく、キャンパス内で友人や海外からの留学生との交流を育むと同時に、教職員と人生や学生生活全般について語り合う、そんなキャンパスにしたいと考えている。

さらに、一般の市民も自由に散策できるキャンパスを作りたいと考えている。市民の協力あってこそ大学であり、市民とともにある大学でありたいと思うからである。